1-2) 地域に根付く手漉き和紙と大凧合戦にみる歴史的風致

昭和 30 年代の五十崎大凧合戦

□はじめに

喜多郡では古くから紙漉きが行われてきた。特に内子町で紙漉きが盛んになったのは宝暦年間(1751 ～ 1764) といわれており、大洲藩の専売制のもと、原料となる楮の栽培と和紙の生産が奨励・統制されていた。

この地域で漉かれる和紙は「大洲和紙」と呼ばれ、その後も地域の産業として明治、大正、昭和と盛衰を経て、現在、五十崎地区で天神産紙(てんじんさんし)工場と和紙工房ニシオカの 2 軒が操業を続けている。

また五十崎地区においては、鎌倉時代以来の歴史があるとされる大凧合戦が今も続いている。この 5 月 5 日の端午の節句に開催される大凧合戦では、この地域で漉かれた和紙が大凧に使われ続け、凧づくりや凧文字の技とともに多くの住民から親しまれている。また大凧合戦では初節句を祝う風習も受け継がれ、地元の神社である宇都宮神社や岡森神社との関係も深い。

この大凧が舞う新緑の風景は、和紙生産という伝統産業と大凧合戦という文化・風習が織りなす季節の風物詩として五十崎地区の象徴といえる。

天神産紙工場

昭和 15 年 (1940) の工場
(村上節太郎氏撮影)

1　関連する建造物

(1) 現存する和紙生産工場

①天神産紙工場

和紙生産の好況期、大正初期には製紙工場の創業が相次いだ。その一つ、大正 5 年 (1916) 創業の井口(いのくち)製紙が前身。工場は木造で、片流れの屋根が並ぶいわゆるのこぎり屋根だったことが昭和 15 年 (1940) の写真からわかる。一部修理等を行っているが、現在もこの写真と同じ建物群が見られ、大半が創業当時のものと考えられている。煉瓦造のボイラーや水槽も現存し、一部現役で使われている。

昭和 61 年 (1986)『伊豫(いよ)の手漉き和紙』によると、井口製紙の最盛期は大正 7 ～ 8 年 (1918 ～ 1919) で、昭和初期の不況により一時休業に追い込まれた。昭和 6 年 (1931) に天神産紙へと改称し運営を再開、同 9 年 (1934) に株式会社となった。同 41 年 (1966) に現社長沼井光博氏の父淳弘氏が社長に就任し、五十崎の手漉き和紙の技術を今につないでいる。

②和紙工房ニシオカ

西岡芳則氏が経営する紙漉きの工房。建物は木造瓦葺 2 階建、真壁造。梁間 4 間、桁行 4 間。1 階が工房で 2 階は物置。聞き取りによると昭和 25 年 (1950) 前後に建築されたものである。幼少期の芳則氏が写る同 30 年 (1955) 頃撮影の写真にも現在の工房を見ることができる。

西岡家が紙漉きを始めたのは芳則氏の祖父美宣氏の代で、大正期には紙漉き業が行われていた。昭和 61 年 (1986)『伊豫の手漉き和紙』によると昭和 22 年 (1947) の大洲紙工業組合員に美宣氏の名前がある。

和紙工房ニシオカ

昭和 30 年 (1955) 頃の工房

(2) 神社・城跡

①宇都宮神社

龍王城跡の南側の中腹に位置し、五十崎地区（大字五十崎）全体に氏子をもつ。承平 4 年 (934) の藤原純友退治のとき、橘遠安(たちばなのとおやす)の従者宇都宮という者が下野国 (現栃木県) 宇都宮からこの地域に渡ったと伝わる。その孫が五十崎郷 3,000 石を拝領し、龍王城に移り、下野国の先祖の氏神宇都宮大明神を勧請し総鎮守として崇敬した。

大己貴命(おおなむちのみこと)、事代主命(ことしろぬしのみこと)、建(たけ)（武）御名方命(みなかたのみこと)が主祭神で、恵比須像と三面大黒像が祀られている。現在の社殿は、平成 10 年 (1998) の『改訂　五十崎町誌』によると、本殿が明治 13

宇都宮神社

年 (1880)、幣殿・拝殿が同 10 年 (1877) の上棟で、昭和 43 年 (1968) と同 59 年 (1984) に古くなった建物の大修理が行われている。特に 59 年の修理は屋根の葺き替えを行ったため大規模なものであった。

この地域では 5 月 5 日に初節句を祝って凧を上げる風習があり、昭和 41 年 (1966) からいかざき大凧合戦に合わせて合同で初節句の神事を行っている。その初節句の神事を宇都宮神社と岡森神社の神主が隔年で行っている。

岡森神社

上 _ 岡森神社側から見た五十崎地区が描かれた絵馬（宇都宮神社蔵）
下 _ 宇都宮神社側から見た天神地区が描かれた絵馬（岡森神社蔵）

龍王城跡（〇印が本丸跡）

②岡森神社

祭神は少彦名命。天神地区（大字平岡）一帯に氏子をもつ。天保 9 年 (1838) に失火によって社殿が全焼しているため一切の記録が消失している。その後、現在地に社殿が造営され、菅原道真公とともに奉斎されている。社殿への階段に明治 26 年 (1893) と刻まれていることからその頃にはこの地に築造されたと考えられる。毎年 10 月 15 日の秋祭りには、天地地区にある離宮（現天地集会所）にも御旅所として立ち寄り、神事が行われている。

5 月 5 日のいかざき大凧合戦の初節句の神事を岡森神社と宇都宮神社の神主が隔年で行っている。なお、両神社は小田川の対岸にあり、それぞれ対岸から見た地域を描いた絵馬が奉納されている。いずれも明治 19 年 (1886) に同じ作者によって描かれた。

③龍王城跡

龍王城跡は、五十崎盆地と内子盆地を隔てるように西から小田川に向かって突出した標高 110m の丘陵上に位置する。北側と東側は小田川によって囲まれて急崖をなし、南西方のみ尾根によって背後の山に続く。城跡からは内子と五十崎の市街地を一望することができる。

城主については諸説伝えられているが、『大洲随筆』（正確な年代不明、宝暦末年 (1764) 以降の編）によると戦国時代には、河野氏の下で郡内に勢力を振るっていた大除城主・大野氏の命により、同一族の城戸氏が居城していたとされる。城戸直宗の時、土佐の長宗我部元親と組んだ曽根城主・曽根宣高の夜襲に遭い、天正 7 年 (1579)（文献によっては天正 5 年 (1577)）に攻め落とされたという。その後は宣高の客将であった河内駿河守吉行が城主となったと伝わるが、同 13 年 (1585)、豊臣秀吉の四国征伐に際して曽根氏とともに小早川隆景に降伏し、廃城となった。

現在、龍王城跡は小田川や豊秋橋から見る風景には欠かせないものであり、五十崎地区のシンボル的な存在として親しまれている。

2　関連する活動

(1) 手漉き和紙に関連する活動

①大洲和紙の歴史

喜多郡では古くから紙漉きが行われてきた。寛平 9 年 (897) の『正倉院東南院文書』にも伊予国が納めた紙の半分を喜多郡が担っていた記録がある。

元禄年間 (1688 ～ 1704) 初期には越前国（福井県）出身の宗昌禅定門という六部（巡礼僧）が五十崎に住み着き、越前奉書紙の技術を伝授したといわれている。（香林寺の元禄 15 年 (1702) の墓碑及び過去帳より。）大正 6 年 (1917) の『愛媛県誌稿』によると、特にこの地域で紙漉きが盛んになったのは宝暦年間 (1751 ～ 1764) で、大洲藩は楮の栽培を奨励するとともに和紙の生産販売を統制するために、紙役所を内ノ子村、楮役所を五十崎村に設置、専売制をしいた。

宝暦 12 年 (1762) の『紙御役所御仕法旧記』によると、大洲藩内に紙漉き人は約 2,300 人おり、そのうち 68% を内子・五十崎が占めていたという。

明治に入り藩の統制がなくなると、粗製乱造により品質が低下した。そこで、大正 3 年 (1914) の『喜多郡の華』によると、当時内子町の紙商であった吉岡平衛が三椏を原料とした改良半紙に着目、明治 18 年 (1885)、土佐から技術者を招いて自ら研究。翌年には天神村の栗田邦住や宮脇辰次郎とともに天神村で技術指導を行い、品質改善に努めた。

和紙生産は、明治中期までは主に個人事業か農家の農閑期の副業であったが、その後、大正初期には工員が 60 ～ 80 人、抄舟が 20 ～ 25 槽もの規模の製紙工場が創業され、製紙業者数や生産額は最盛期を迎えた。

その後、しだいに洋紙が普及したことなどにより従事者は減少の一途をたどったが、現在でも五十崎地区では、好況期創業の製紙工場の一つ天神産紙工場と、個人で代々紙漉きを続ける和紙工房ニシオカがその伝統を受け継いでいる。昭和 52 年 (1977) には大洲和紙が町の無形文化財に指定、保持団体として大洲手漉き和紙保存会が認定されている。また同年国の伝統工芸品にも指定され、天神産紙工場の担い手のうち 2 人が国の伝統工芸士に、2 人が県の伝統工芸士に認定されている。

②手漉き和紙の生産

大洲和紙は主に楮や三椏を原料とし、漉く紙によって配合を変えている。これら原料を煮沸し手作業でごみなどを取り除いて細かくしたものをノリ（トロロアオイ）と抄舟の中でまぜ、簀桁ですくって漉いていく。五十崎地区では簀桁を揺り動かしながら均一な厚みにする「流し漉き」という昔から続く技法で和紙の生産が行われている。

天神産紙工場は、大正 14 年 (1925) の『喜多郡郡制記念史』によると、大正 5 年 (1916) に創業した手漉き和紙工場、井口製紙が前

昭和 43 年の天神産紙工場での紙漉き

提灯紙を漉く西岡芳則氏

身。当時需要の多かった改良半紙の生産に取り組み、同 7 ～ 8 年（1918 ～ 1919）には工場を拡大。抄舟 50 槽を構え、一時は 200 人もの従業員を抱える近隣有数の企業に成長していった。『伊豫の手漉き和紙』（昭和 61 年 (1986)）によると、昭和初期の不況により一時休業となるが、昭和 9 年 (1934) には株式会社天神産紙工場として再起。戦時中は気球用の強靭な和紙を漉いたこともあるという。

『伊予紙見本帖』(昭和 3 年 (1928)) によると、明治 44 年 (1911) に 1432 戸あった大洲和紙の製造戸数は、大正 15 年 (1926) には 264 戸に激減しており、内子地区や御祓地区などにおいては紙漉きが消滅してしまった。『伊豫の手漉き和紙』（昭和 61 年 (1986)）によると、大洲紙工業組合員は昭和 22 年 (1947) が 58 軒、さらに同 38 年 (1963) には 13 軒と減少の一途をたどった。そのような中で、天神産紙工場は同 57 年 (1982) の段階で従業員 30 人、抄舟 13 槽を稼働させていた。

《大洲和紙の生産工程》

■煮沸（しゃふつ）

三椏や楮、マニラ麻などの原料を煮て繊維質を取り出す作業。原料に応じた煮沸時間の見極めが重要。

■叩解（こうかい）

取り出した繊維をほぐして適当な長さに切断し、繊維同士の絡みをよくする。ごみなどは手作業で丁寧に取り除く。

■抄紙（しょうし）

抄舟に水を張り、原料とノリ（トロロアオイ）をかき混ぜて簀桁ですくい上げ、前後に揺り動かしながら一定の厚みに漉いていく。厚みをそろえるのが最も難しいとされ、熟練の技術が求められる。

■乾燥

漉きあげた紙を一枚ずつ乾燥機に張り付け、刷毛でシワを伸ばしながら乾かす。

現在も創業時から建つ工場で、主に障子紙や書道半紙を漉いており、いかざき大凧合戦の凧にも用いられている。従業員は5～6人だが、20代、30代の女性も従事し、若手の育成にも励んでいる。

和紙工房ニシオカは、現在、西岡芳則氏が紙漉きを行っている。西岡家が紙漉きを始めたのは芳則氏の祖父美宣氏で、大正期とされる。『伊豫の手漉き和紙』（昭和61年(1986)）によると昭和22年(1947)の大洲紙工業組合員に美宣氏の名前がある。

当時は三椏（みつまた）の栽培や「楮蒸（かじむ）し」も行っていた。楮蒸しは、楮や三椏を蒸して柔らかくして皮をはぐ作業で、紙漉きを行う職人はこの楮蒸しによって下処理された原材料を購入し、漉いていた。楮や三椏は田や畑の畦に植え、農業の傍ら、冬に紙漉きをしていた。美宣氏やその息子勝美氏の時代は大半が障子紙を漉いていた。どこの家庭も秋祭り前に障子を張り替えるため、それに合わせてつくっており、一部は行商人に卸していた。

芳則氏は父勝美氏が早逝し、昭和55年(1980)に帰郷して紙漉きに従事。天神産紙工場で半年ほど研修の後、父の後を継いだ。現在は父の築いた工房で、凧紙や版画用の紙、提灯紙などを漉いている。一部版画用の紙は海外へも出荷している。

楮や三椏を煮るときには辺りには湯気が立ち、独特な匂いが立ち込める。表では晒された三椏や楮が水に揺れ、工場からは一定のリズムで漉く抄舟の波の音が聞こえてくる。それにより紙漉きの営みを感じさせてくれる。

(2) いかざき大凧合戦に関する活動

いかざき大凧合戦は、毎年5月5日のこどもの日に五十崎の豊秋河原で開催され、初節句を祝い健やかな成長を願う催しでもある。昭和53年(1978)には県の無形民俗文化財に指定されている。

①起源

凧合戦の起源については、明治44年(1911)の『五十崎村郷土誌』に鎌倉時代に始まったとされており、旧暦の5月5日、男子出生の初節句の祝いとして凧をあげていたのが、風のいたずらで糸がもつれ合い、合戦が始まったとされる。明治頃には、大きさ畳2枚～4枚が普通で、中には畳8枚～16枚のものも

左 _5月5日に開催されるいかざき大凧合戦　右 _ 健やかな成長を願う初節句の出世凧

あり、富裕な家では、1カ月も前から凧の糸をつくり、骨を削り、凧の模様には子どもの名前、屋号、商号など、五十崎独特の凧文字で彩色していた。当日は、小田川をはさみ、それぞれ陣をかまえ、4斗樽(72L)の酒を酌で飲み、鉢巻、草履のいでたちで威勢よく凧を揚げていたという。昭和35年(1960)から、新暦5月5日となり五十崎地区の一大行事として今日まで受け継がれている。

②行事の概要

大凧合戦の日は大空に何百という凧が揚がる。合戦は、凧の糸に「ガガリ」とよばれる刃物が付けられており、凧をたくみに操ってガガリで相手の糸を切れば勝ち、切られれば負けとなる。小田川の豊秋河原で五十崎側と天神側で開始時間を決めて勝負が行われる。町内の自治会や企業、友人同士などでチームをつくり、この日ばかりは大人たちが童心に返って楽しんでいる。

一方で大凧合戦の起源、5月5日の初節句を祝い、合戦に先立って五十崎自治センターで神事が行われている。前年度中に生まれた子どもが対象で、朝9時から神主が祝詞をあげ、無事成長を祈願し菖蒲を渡す。その神主は宇都宮神社と岡森神社が毎年交代で務めており、お神酒を受ける盃のかわらけやお守りなど、神事に先立って各神社でお祓いされたものが渡される。大凧合戦の行事の一つとして始まったのは昭和41年(1966)からで、大凧に子どもの名前を記した「出世凧」も作られ、神事の後に揚げられる。出世凧の子どもの名前は親や親族たちが事前に思いを込めて書いており、当日の揚がった喜びはひとしお

初節句を迎える子どもたちを対象に行われる神事

民謡調の音楽に合わせて舞う、名物「凧踊り」

昭和41年に始まった大凧合戦での合同初節句神事

地元保存会による「大凧出世太鼓」

である。近年は町内だけでなく町外からの参加も募集するようになり喜ばれている。

この他、昭和 34 年 (1959) に五十崎商店街有志が始めた、奴凧（やっこだこ）の化粧をして凧合戦の激しい空中戦をユニークに舞う「凧踊り」や、五十崎中学校の生徒や有志たちが振付をアレンジした「新作凧踊り」、地元保存会による「大凧出世太鼓」の和太鼓演奏などの催しがある。周辺に太鼓の軽快なリズムや「凧踊り」の音楽が響き、地元をはじめ県内外から訪れる多くの観光客とともに一日中賑わいを見せる。近年では平成 19 年 (2007) に「内子百畳凧愛好会」が発足し、毎年百畳凧の製作に取り組み、大凧揚げに挑戦している。

五十崎・天神の家並みや龍王城跡、小田川や豊秋河原などを背景に多くの大凧が空を舞う様子は、五十崎の初夏の風物詩であり、地域の人たちにとって美しいふるさとの光景であり続けている。

③凧づくりの工程

凧はまず竹で骨組みを作り、その上に五十崎の手漉き和紙を貼り、絵模様や文字を書いてつくられる。合戦に使われるのは 165cm×135cm の大きさのものである。凧に使われる和紙は、天神産紙工場と和紙工房ニシオカが毎年交互に生産している。

合戦用の凧づくりは、竹伐りが 10 月から冬にかけて行われる。12 月頃から 1 月にかけては和紙を貼るところまでつくり、2 月頃に絵付け、文字描きをする。現在は長年凧づくりに携わる方たちを中心に、実行委員会メンバーも凧づくりを手伝い、技術の伝承が広がるよう努めている。

《合戦用凧づくりの工程》

■竹割り

■骨組み

■紙貼り

■文字描き

根付け（自分たちで行う五十崎中学校の生徒たち）

昭和 33 年頃の様子

スポンサー名入りの合戦凧。左が天神側の「天」マークの凧、右は全面オリジナル図案の凧

本番が近づくと根付けを行う。これは凧揚げの際にバランスの要となる糸を、凧の前面に張ることをいう。かつて根付けはほとんど自分たちで行い、風を読み、バランスを微調整し、凧をコントロールしていた。現在も地元の自治会などは自分たちで根付けをしている。

また地元五十崎中学校の生徒たちも凧づくりを行っており、骨を組み、和紙を貼り、思い思いの文字を描く。当日、この凧で 2 チームに分かれて合戦を行っており、学年を追うごとに凧づくりや凧文字、凧揚げの腕を磨いている。

④五十崎の凧の特徴

五十崎の凧の大きな特徴は字凧であることで、初節句を迎える子どもや英雄の名前、屋号、商号などを独特の凧文字と呼ばれる文字で描いていた。現在は「五」か「天」の漢字一文字と簡単なものが主となっている。これはそれぞれ五十崎側、天神側を意味し、合戦の際のチーム分けにもなっている。

凧文字のベースは江戸文字や籠文字、ひげ文字など。描く人によって少々異なるが、文字が枠いっぱいに描かれ、かつ文字同士がくっついた形になっているのが特徴。近くでは見にくいが、空に揚がったときに白い文字が浮かんで判読できるようになる。これは文字の外側に色を入れて塗る面積を小さくし、軽量化をはかっているためでもある。現在凧文字を描くことができるのは 40 代から 80 代までの男女 5 ～ 6 人で、地域の凧づくりに一役買っている。先述のとおり五十崎中学校でも毎年凧文字を学習し、大凧合戦にあわせて凧を製作しているほか、地元有志によってデジタルの「凧文字フォント」が製作されるなど愛好され、活用されている。

合戦用凧は、本来自分たちでつくり、好き

な文字や模様を描いていたが、先述のとおり自分でつくれる人はごくごく一部となっている。現在では、この伝統行事を支える「スポンサー」として、「五」や「天」の凧の下に地元企業や団体が名前を入れたり、また好きな絵や文字を凧全面に入れたりしている。参加の形は時代とともに変わってきているが、高々と揚がる凧に願いを込める思いは変わらない。

このスポンサーの制度は昭和32年(1957)に始まった。現在は文字のみが15,000円、全面が18,000円。五十崎地区はもとより、内子地区や小田地区の商店や企業からも多くの出資がある。これらの凧は、スポンサーが揚げない場合、当日は貸凧となり、誰でも有料（1,000円）で「ガガリ」と一緒に借りて合戦に参加することができる。このようにして長きにわたり、伝統を守り、地域を盛り上げようと多くの人たちが大凧合戦を支え続けている。

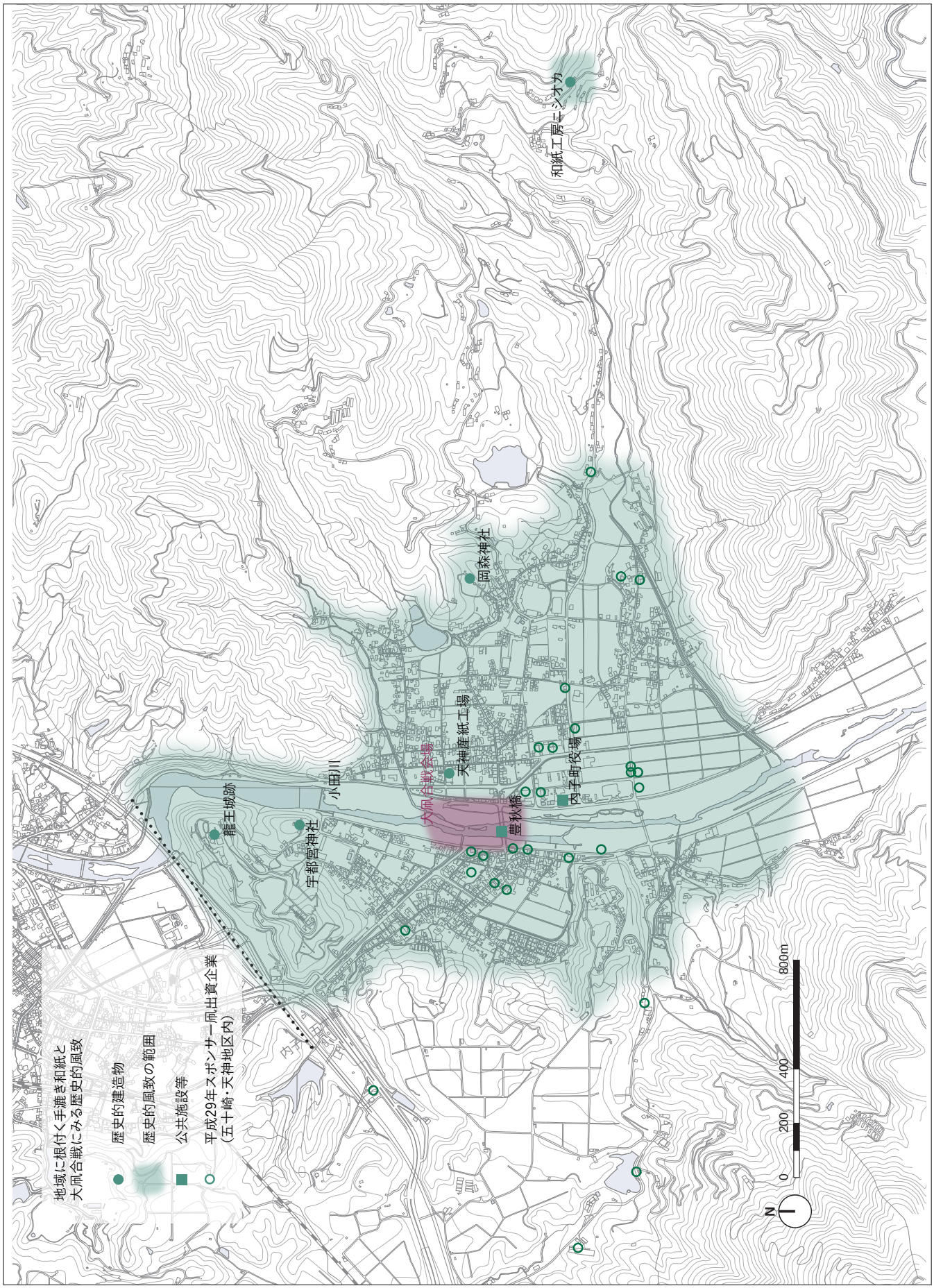
全面に絵を描くのは内子高校美術部が担い、年に35統（とう）（この地域では凧を「統」と数える。）ほど製作。これも10年以上続いている。老若男女、さまざまな形で関わる人たちがいることで手漉き和紙や大凧合戦が未来に受け継がれていく。

平成元年(1989)には、地方公共団体としては全国初となる凧博物館が完成。五十崎出身の地理学者・村上節太郎氏が日本各地及び外国から収集した約2,000点の凧を町に寄贈。それらの展示及び観賞、凧づくりの体験学習などで五十崎地区の凧文化を広めている。

□まとめ

大洲和紙は名前のとおり大洲藩内、つまり現在の大洲市や喜多郡を中心に広まった。時代の変化とともにほとんどが廃業していく中で、この五十崎地区にだけ2軒残っている。その理由の一つとして大凧合戦との深い関わりがあったことは大きい。単に需要の話ではなく、凧合戦が年中行事として生活に溶け込み、健やかな成長を願う気持ちは親から子、子から孫へと受け継がれている。それと同時に、地域の特産品として手漉き和紙への誇りにもつながっている。これは、手漉き和紙の職人たちにとっても使命感となり、キャリアが60年を超えてもなお漉き続ける職人を生んでいる。今、手漉き和紙は、芸術家や伝統工芸を愛する人たちとの融合によって、新たな展開へもつながっている。

豊秋河原から見える龍王城跡、家並み、小田川、龍宮堰などを背景に伝統産業の手漉き和紙を使った大凧が舞う。その風景は、五十崎地区・天神地区の中心部であれば大半の範囲で見ることができ、それらを愛着を持って受け継ぐ人々が歴史的風致をつくり、感じることができている。それは守り続けるべき良好な歴史的風致といえる。


地域に根付く手漉き和紙と
大凧合戦にみる歴史的風致
歴史的建造物
歴史的風致の範囲
公共施設等
平成29年スポンサー凧出資企業
（五十崎・天神地区内）
龍王城跡
宇都宮神社
小田川
大凧合戦会場
天神産紙工場
岡森神社
豊秋橋
内子町役場
和紙工房ニシオカ
0
200
400
800m
N

コラム　□ 手漉き和紙の利活用 □

《小学生の卒業証書用紙漉き体験》

五十崎の手漉き和紙の伝統を未来へつなごうと、現在、町内全小学 6 年生が卒業証書の紙を自分たちで漉いている。この取組は和紙工房ニシオカの協力により 20 年ほど続いている。記念になることはもとより、12 月の寒い時期に実際の職人が使っている工房で製作することで、かつての紙漉き職人の苦労を体験するなど貴重な機会となっている。

卒業証書用の和紙を漉く小学生

《和紙創作展などの開催》

五十崎地区では地元有志による「界わいづくり委員会」が大洲和紙の伝統を維持したいと、手漉き和紙の新たな活用方法を提案する取り組み「和紙創作展」を開催している。和紙を使った行灯やアクセサリーなど、現代に合った用途の手作り作品が展示・販売される。

《和紙の版画ポスター》

地元の版画家山田きよ氏による和紙の版画ポスターも内子町内ではなじみが深い。きっかけは芝居小屋内子座が昭和 60 年 (1985) に修理を終えて復活した際、住民グループによる興行のポスターを手刷りで製作したことによる。以後、内子座のポスターはもとより、いかざき大凧合戦や町内の行事などでも製作されている。町内では家庭でも店舗でも飾っている家は多く、五十崎の手漉き和紙に町内の風景などが描かれた和紙ポスターは町民にとって愛着をもって大事にされている。海外の人にも喜ばれている。

五十崎の手漉き和紙に刷られた山田きよ氏の版画

《五十崎社中のギルディング》

近年では「五十崎社中（しゃちゅう）」（代表：斎藤宏之氏）がギルディングという手法を使い、和紙の振興を図っている。これは金属箔を使い、紙や木材、布などの上にデザインを施す手法で、同社の斎藤宏之氏がフランスのデザイナー、ガボー・ウルヴィツキ氏から伝授された。壁紙や文具類などの製品が作られ、その技は高い評価を得ており、2015 年のミラノ博覧会にも出品しているほどである。

五十崎社中の作る
ギルディング和紙

《提灯紙の生産》

和紙工房ニシオカは提灯紙も生産しており、大洲市の「ひらぢ屋提灯店」と松山市の「花山ちょうちん店」へ卸している。愛媛県内では提灯店は減少傾向にあり、内子町の含まれる南予地区では「ひらぢ屋提灯店」1 軒のみとなっている。そのため内子町からの提灯の注文先は「ひらぢ屋」が大半を占める。五十崎で漉かれた和紙が提灯となって、秋祭りなど内子町のまちの風景をつくっている。